

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401,044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第106号

シリーズ川崎の歴史を知ろう！
 「川崎の文化財」

橋樹官衙遺跡群 [たちばなかんがいせきぐん] (6)

=== 影響寺遺跡 - 古代の葺・古代影響寺に葺かれた瓦 ===

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 栗田 一生

前回から、国史跡橋樹官衙遺跡群を構成する遺跡の1つ、影響寺遺跡(ようごうじいせき)について取り上げていますが、今回は影響寺遺跡における発掘調査で発見されている瓦について、お話ししようと思います。

影響寺遺跡では、これまでに18回の発掘調査と2回の学術調査が行われています(第1図)。これまでの調査で1トンを超える瓦が出土しており、調査で確認された遺構の様子と合わせて、古代影響寺には(推定)金堂と塔という2つの主要な建物があり、その屋根全体に瓦が葺かれていたと考えられています。

ちょっと話がそれますが、「屋根全体に瓦が葺いてあるのは当然でしょ」と思う方が多いのではないのでしょうか。しかし、古代では瓦を作ったり、手に入れたりすることは非常に大変だったようで、地方の寺院では瓦を軒先だけや正面の屋根だけに葺いた建物が存在していました。現代の私たちから見れば不思議な感じがしますが、人目につく部分だけでも瓦を葺いて目立たせ、自分の力を誇示したいという、見栄っ張りな当時の地方の有力者達の姿が目浮かびます。そうした古代の状況の中で、古代影響寺は屋根全体に瓦を葺いた総瓦葺建物があったことが明らかになっているということは、古代影響寺を造営した橋樹評(郡)の有力者はかなりの力をもっていたということの証拠と言えるでしょう。

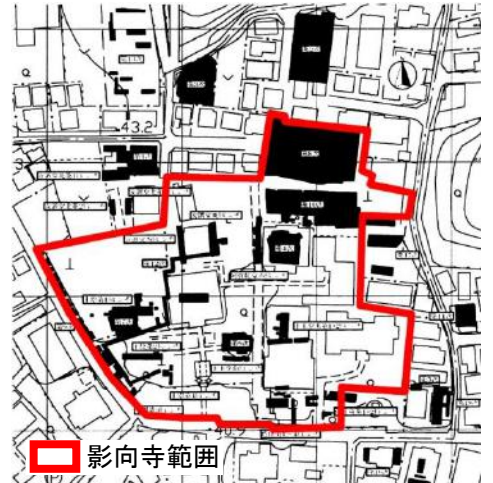
話を戻しましょう。古代の寺院には、いろいろな種類の瓦が用いられていました(第2図)。影響寺遺跡からも様々な瓦が発見されており、種類別の出土量では、平瓦が最も多く全体の約83%を占め、次に丸瓦(約15%)の順となっています。また、全体としては少数ですが、軒瓦(軒丸瓦・軒平瓦)や熨斗瓦(のしがわら)等といった瓦も発見されています。これらの

瓦の中で多くの情報を得られるのが軒丸瓦で、文様や瓦の製作技法等から瓦の製作年代やその変遷を辿ることができます。影響寺遺跡から出土する軒丸瓦は、全て8枚の花びらをもつ蓮華の花をモチーフにした八葉蓮華文(はちようれんげもん)ですが、外区(がいく)の有無で大きく2

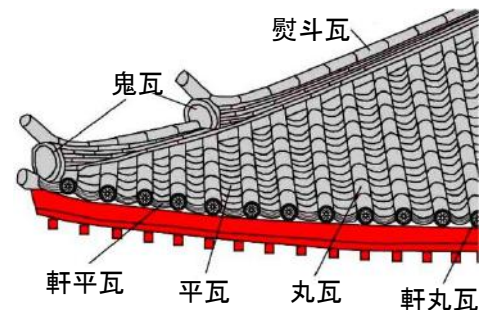
種類に分類できます。調査の結果、外区をもつ八葉蓮華文が古代影響寺創建期(1期)の瓦であり、外区をもたない八葉蓮華文は8世紀中頃に再建または改修された時(3期)の瓦であることが明らかになっています(第3図)。

古代の瓦は、『布目瓦(ぬのめがわら)』と呼ばれるほど、ほとんどの瓦の凹面に布目が見られ、古代影響寺の瓦もほとんど布目瓦です。古代影響寺の瓦の多くは、瓦製作技法の1つである「桶巻き作り」で制作されています。桶巻き作りは、桶の外側に布を巻き、そこに粘土を貼り付けて叩き板等で形を整えた後、内側の桶と布を外すという技法です。この技法で制作した瓦には、凹面に布目とともに、幾筋も桶の板材の痕の線が見られます(第4図)。

このように、今回は影響寺遺跡から出土した古代影響寺を彩った瓦についてお話ししました。今を遡ること1,300年以上前の人々もきっと感じたであろう古代寺院の荘厳さ等を想像し、みなさんも古代に思いを馳せてもらえればと思います。(つづく)



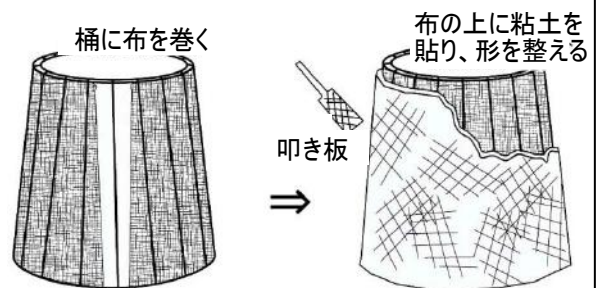
第1図 影響寺遺跡の調査地点



第2図 瓦葺き模式図



軒丸瓦 1A 型式 / 軒丸瓦 1B 型式(1期) / 軒丸瓦 3A 型式(3期) / 軒丸瓦 3B 型式(3期)
 第3図 影響寺遺跡から出土した軒丸瓦



第4図 瓦葺き模式図

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第76話

徳川入府（2）～幕府の知行

小島 一也（遺稿）

天正十八年(1590)江戸に入った徳川家康は城下町を拓き、江戸近郊に徳川恩顧の家臣に知行地を与え旗本領とし、検地を実施、慶長八年(1603)徳川幕府開設時には確固たる幕藩体制を敷いております。

右記の表は、村上直氏著「江戸近郊農村と地方巧者」よりお借りしたのですが、同書や新編武蔵風土記稿、川崎市史などを参考にして、現麻生区内村々の領主(知行主)を少し詳しく調べてみると次のとおりです。なお知行高とは村の石高で、各領主は個別に石高に応じての年貢の決定・徴収権、領民使役などの領主権を持っていたといわれます。

黒川の駒井右京は元武田家臣で大坂の陣で戦功を立て、多摩・高座郡にも知行地を持っていました。孝三郎はその子孫でしょうが、幕末知行高の激増が目立ちます。栗木の岡野平兵衛は前稿(56話)で述べた栗木林清寺の開基で、元北条家臣から徳川氏の恩顧を受け、長津田・甲斐にも知行地を持つ1500石の旗本だったようです。万福寺の天野孫左衛門は徳川譜代の家臣で、隣村の坂浜・蓮光寺そして入間郡や葛飾郡にも知行地を持つことから、天野氏知行の中心は万福寺ではなさそうです。椿井喜之助は織田信長家臣の子で、寛永四年(1627)家光のお小姓組に列せられ、金程・細山・下麻生にも知行地を与えられています。

五力田・古沢村は江戸初期片平の前場氏の知行下にありましたが、寛永元年(1624)朝倉織部の知行地になりました。この朝倉家は豊臣秀吉に仕えた後裔で、家光の近習となり稲城の長沼・大丸などにも知行地を与えられています。片平の前場久三郎は織田信長の旧臣で徳川家に仕え文禄三年(1594)片平村を知行地としていますが、子息が罪を犯したことにより天領と変わり、この地方の天領を統括する松村忠四郎なる者の支配地になっています。志光(弘)寺とは現在の修廣寺のことで、境内長瀬家の墓地には元和八年(1622)造立の「前場院殿半入宗園居士」と記された板碑型墓塔が今も保存されています。

上麻生の三井市蔵は甲斐武田の旧臣で三井左衛門佐吉正と称し、徳川入府間もない慶長期にこの地と遠州城東郡に1500石の知行地を得て旗本頭などの要職を務めています。下麻生の安藤弥兵衛は三河譜代の家臣で、上野国にも知行地を持ったと言われ、後に佐渡金山、伊勢山田奉行に任じられました。早野の富永忠右衛門



殿様の墓 ー早野・戒翁寺ー

重吉は北条氏の家臣で武芸に優れ、甲斐・山梨にも計1300石の知行地を持ち、槍奉行、後には駿府町奉行になったと伝えられ、寛永年間に現早野の戒翁寺を開き、殿様の墓と呼ぶ4基の五輪塔を残しています。王禅寺村は増上寺領、王禅寺領で、他の旗本領とは違う扱いを幕府から受けていたようで、後述したいと思います。

岡上の水野伝蔵は織田信長の旧臣だったが徳川入府後、この地と多摩郡、入間郡に知行地を得ており、岡上氏発祥の岡上景純は家康に仕え八王子代官となっていますので水野氏はその後任だったのでしょうか。子の知行地は元禄二年(1689)片平と同じ天領となっていきます。高石の加々美金右衛門の父才兵衛は元武田家臣で在地武士を持ち(潮音寺開基)、下野国河内郡にも500石の知行地を持ち直参旗本となつて

江戸時代の川崎市域西北部の村別領主、知行高

村	慶安年間(1648~51)		幕末・維新时期	
	領主	知行高	領主	知行高
黒川村	駒井右京	90石	駒井孝三郎	261石
栗木村	岡野平兵衛	80	岡野隼三郎	195
万福寺村	天野孫左衛門	32	天野滝之助	32
	椿井喜之助	38	椿井庚次郎	51
古沢村	朝倉織部	66	朝倉小源太	92
五力田村	朝倉織部	40	朝倉小源太	79
片平村	前場久三郎	268	松村忠四郎	293
	志光寺領	4	修弘寺領	4
上麻生村	三井市蔵	550	三井万次郎	672
			常安寺領	6
下麻生村	安藤弥兵衛	300	安藤織部	324
王禅寺村	増上寺領	192	増上寺領	383
	花蔵院領	30	王禅寺領	30
早野村	富永忠右衛門	221	富永孫六郎	245
			戒翁寺領	6
岡上村	水野伝蔵	264	大久保鉞四郎	298
	東光院領	15	東光院領	15
金程村	椿井喜之助	66	椿井庚次郎	85
細山村	椿井喜之助	190	椿井庚次郎	312
高石村	加賀美金右衛門	110	加賀美三四郎	133

村上直『江戸近郊農村と地方巧者』より抜粋



長瀬家墓地内の板碑型墓塔

重吉は北条氏の家臣で武芸に優れ、甲斐・山梨にも計1300石の知行地を持ち、槍奉行、後には駿府町奉行になったと伝えられ、寛永年間に現早野の戒翁寺を開き、殿様の墓と呼ぶ4基の五輪塔を残しています。王禅寺村は増上寺領、王禅寺領で、他の旗本領とは違う扱いを幕府から受けていたようで、後述したいと思います。

岡上の水野伝蔵は織田信長の旧臣だったが徳川入府後、この地と多摩郡、入間郡に知行地を得ており、岡上氏発祥の岡上景純は家康に仕え八王子代官となっていますので水野氏はその後任だったのでしょうか。子の知行地は元禄二年(1689)片平と同じ天領となっていきます。高石の加々美金右衛門の父才兵衛は元武田家臣で在地武士を持ち(潮音寺開基)、下野国河内郡にも500石の知行地を持ち直参旗本となつて

います。なお、早野の隣村寺家、鉄、成合は箕三郎左衛門正重、鴨志田は杉浦勝吉なる三河譜代の者の知行地となり、三輪、大蔵は前述の市川加賀守に代わり今井八郎左衛門と呼ぶ旗本の知行地になっています。

参考資料:「新編武蔵風土記稿」「川崎市史」「江戸近郊農村と地方巧者(村上直)」「中里村郷土史」

シリーズ

時間と時計の話 第2部

時計と時間の観念(11)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆腕時計の誕生◆

第1部の「和時計と西洋時計」に始まる『時間と時計』のシリーズも、今回で20回になりました。思いの外に長くなってしまったのですが、ようやく終わりに近づいたようです。私たちにとって、時計の思い出と言えば、おじいさんの大きな古時計ではなく、圧倒的に腕時計ではないでしょうか。シリーズの最後に腕時計の誕生と普及の話を書かせていただきます。

第1部に記しましたが、時計が教会の占有物から市民の物になって行く過程では、時計は教会や市庁舎の塔、公共の広場などに高く掲げられたみんなの物でした。それから長い時間を経て置き時計が生まれ、さらに時間を経る中で懐中時計も誕生して、個人の時計が優位を占めるようになりました。

腕時計の着想は、当然懐中時計を腕に巻けないかと考えた人物によって、表舞台に登場するのですが、それでは腕時計を最初に構想したのはいったい誰なのでしょう？ それは歴史的には大変有名で、世界史を学んだ人なら、どんなに世界史嫌いの人でも、この名は知っているだろうと言える人物です。答えは16世紀後半の1558年～1603年まで、長きに渡ってイングランド女王の座にあった、エリザベス1世です。

ブレスレットの歴史は古く、初期中世の騎士たちは、戦闘で敵と剣で打ち合う際に、自分の小手を守ろうと、大きな青銅製のブレスレットを腕につけていたのです。その習慣は、中世後半には廃れ、ブレスレットは女性に身につける装身具に変化していったのです。16世紀には、宝石をちりばめた豪華なブレスレットが流行していたのですが、宝石の代わりに発明されたばかりの高価な懐中時計を点けてはどうかと、女王陛下が思召したというわけです。エリザベス1世の女性らしい一面が良く現れている話です。

しかし、誕生したばかりの懐中時計は、腕に点けるには重すぎました。なにしろまだ1kg近くもあったからです。これでは、ブレスレットに取り付けるのは無理でした。こうしてエリザベス女王の折角のアイデアも、すぐには実現する事が出来ず、将来の夢として終わるしかありませんでした。何よりも先ず、懐中時計の小型化が焦眉の急でした。技術の進歩によって、懐中時計の小型化が進み、ブレスレットと懐中時計が結合した今日の腕時計の元祖が誕生したのは、18世紀末～19世紀初めにかけてのことでした。

記録に残っている最初の腕時計は、1806年に時のフランス皇帝ナポレオン1世の妃ジョゼフィーヌが、娘のオルタンス(彼女の前夫との子で、後のナポレオン3世の母)に贈ったものとされています。彼女は娘に2個のブレスレットを贈っているのですが、そのうちの1個が、時計付きのとても珍しいブレスレットだったと記されています。

19世紀初頭には、こうした装飾用の腕時計が作られるようになっていたのですが、この時代装飾用の腕時計は、全く人気が出ませんでした。19世紀はチョッキのポケットに忍ばせた懐中時計の全盛期だったのです。

では、腕時計はいったいどんな必要から普及するようになったのでしょうか。全く嬉しくない話なのですが、腕時計を普及させたのは、近代の戦争なのです。近代戦の特徴は、兵士の集団が互いに組織的に行動して、ぶつかりあって戦うことにあります。広い前線に散開した兵士たちを一斉に立ち上がらせて攻撃に出るために、今までは鐘や太鼓、さらにはラッパなどの鳴り物を使っていました。鳴り物は分かりやすいですし、味方の精神を鼓舞する効果もあったのですが、いかんせん敵にも筒抜けになる難点がありました。銃器の発達した近代戦では、突撃した兵士たちは、襲撃を察知した敵側の狙い撃ちにさらされてしまうのです。日露戦争(1904年～05年)を例にとると、両軍から仕掛けあった遼陽と奉天の会戦を除くと、戦闘ごとの死者の数は、常に攻勢に出た方の陣営が、応戦した側に比べて、勝敗に関係なく判で押したように1.5倍から2倍となっているのです。

こうなると、攻撃の合図に鳴り物を使うことは控えなければなりません。攻撃の開始時間はあらかじめ打ち合わせ、鳴り物なしに予定された時間に粛々と攻撃を開始するには、兵士全員とはいかなくとも、大隊長は勿論、小隊の指揮を執る軍曹や伍長クラスにまで、時計を行き渡らせることができれば一番効果的です。そしてこの場合、いちいちポケットを探って時間を確認するよりも、身体の一部として腕に時計を巻いておく方がずっと便利です。こうして近代の戦争が、腕時計普及の先鞭をつけたのです。

(続)



1600年頃のエリザベス1世



母から時計付きのブレスレット(腕時計)を贈られたオルタンス

小島一氏の遺稿集
『麻生の歴史を探る』
刊行

先年逝去された小島一也氏の遺稿集『麻生の歴史を探る』がご遺族のご尽力により刊行(非売品)されました。

内容は「柿生文化」発行とともに執筆掲載を続けてこられた「麻生の歴史

を探る」シリーズの未掲載分を含む全原稿108話をまとめたものです。途中一時的な中断はありましたが、現在までまさに「柿生文化」とともに歩んできた、柿生文化の歴史をも語る内容となっています。先に刊行されました「麻生郷土歴史年表」と併せ、氏の郷土史研究の集大成として輝き続ける金字塔です。

「柿生文化」への掲載について、現在は第76話ですが、残りについても今後順次行っていく予定ですのでご期待ください。

なお、本遺稿集を直接ご覧になりたい方は柿生郷土史料館に用意されておりますので、ぜひお越しください。また、ご希望の方にはおわけいたします(数量限定につき、友の会会員優先)ので、史料館にご相談ください。



柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

3月 5・12・19・26日(毎日曜日) **4月** 1・8・15・22日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (4月29日は休館です)

第66回
カルチャーセミナー

王禅寺の魅力

『名刹 王禅寺』を著し、今まで誰も手をつけなかった王禅寺の歴史に手を染めた三輪先生に、中世中・後期から現在に至る王禅寺の歴史を中心に、名刹王禅寺の魅力を縦横に語っていただきます。

講師:三輪修三氏 (郷土史研究家)

日時:3月26日(日) 13時30分～ 会場:柿生郷土史料館特別展示室

三輪修三著『名刹 王禅寺』 史料館特価 600円(在庫僅か)

第67回
カルチャーセミナー

国史跡・奈良時代の役所と寺院

川崎北部の遺跡発掘調査を、長年に渡って担当された村田先生に、その発掘の成果を踏まえて、武蔵国、橋樹郡衙の所在とその概要、さらには、関連施設でもある影向寺の姿、そこに生活した人々の精神世界にまで、踏み込んでお話し下します。

講師:村田文夫氏 (川崎市民アカデミー副学長)

日時:4月15日(土) 13時30分～ 会場:柿生郷土史料館特別展示室

村田文夫著『武蔵国橋樹官衙遺跡群の古代学』 史料館特価格600円(在庫僅か)

第12回 特別企画展

「くらしの窓」に見る柿生地区の今昔 その1

～ 昭和時代の柿生地区 ～

昭和30年創刊のミニコミ誌「くらしの窓」が捉えてきた地域の姿をご紹介します。

期間 3月12日(日)～6月24日(土) 場所 柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会
第6回史跡見学バスの旅

浅草寺伝法院庭園の特別公開と和時計のルーツを探る

日 時 2017年4月20日(木)

主な見学先 国立科学博物館、浅草寺・伝法院庭園と大絵馬展、セイコーミュージアム 等

集合・解散 : 7時45分 新百合丘駅北口 ～ 午後6時頃 (新百合丘駅北口→柿生駅付近)

費用 : 7800円

申し込み : 往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで 先着順 44名

必要事項 : 参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号

申込締切 3月31日(金) 問合せ先:小林基男 (080-5513-5154 または 044-989-0622)